

新免遺跡

第11次発掘調査概報

—阪急宝塚線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

1986. 3

阪急宝塚線豊中市内連続立体交差遺跡調査団

豊中市教育委員会

例　　言

1. 本書は阪急電鉄宝塚線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
2. 調査は阪急電鉄株式会社が阪急宝塚線豊中市内連立遺跡調査団と委託契約を結び、豊中市教育委員会社会教育課内に事務局をおいて実施したものである。
3. 調査は1985年8月26日より11月末日にかけて実施した。
4. 整理作業は1985年12月より1986年3月まで豊中市立郷土資料室にて行った。
5. 本書の執筆は、第4・5・6章の遺構の説明を主に祭本敦¹が分担執筆し、他は服部聰志が担当し、編集は服部、祭本の両名で行った。
6. 本書を作成するにあたっては、遺物の実測について酒井泰子、加藤志月、奥野豊子（関西大学）に、写真撮影については山上雅則の協力を得た。

本文目次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 位置と環境.....	3
第3章 總序と遺構の状況.....	6
第4章 弥生時代の遺構・遺物.....	8
第5章 古墳時代の遺構・遺物.....	18
第6章 その他の遺構・遺物.....	22
第7章 まとめ.....	24

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	調査地点位置図	3
第3図	新免遺跡と周辺地形図	4
第4図	上空から見た調査地点	5
第5図	調査地区割図・遺構配置図	7
第6図	S B01全景	8
第7図	S B01、S B02平面図・断面図	8
第8図	S B02全景	9
第9図	S B02出土遺物実測図	9
第10図	S B03、S B04全景	10
第11図	S B03全景	10
第12図	礫集積ピット断面	10
第13図	S B03平面図	10
第14図	S B04全景	11
第15図	S P214 遺物出土状況	11
第16図	S B04出土遺物実測図	11
第17図	S B05全景	12
第18図	S B07全景	12
第19図	S B07平面図・断面図	13
第20図	S B07出土遺物実測図	13
第21図	B地区西側全景	13
第22図	S B10全景	14
第23図	S B10平面図・断面図	14
第24図	磨製石鎌出土状況	14
第25図	S B11全景	15
第26図	S B12全景	15
第27図	S B12出土遺物実測図	15
第28図	竪穴状遺構（S B06）全景	15
第29図	竪穴状遺構（S B06）平面図・断面図	16
第30図	竪穴状遺構出土遺物実測図	16
第31図	人面付土製品	16
第32図	人面付土製品実測図	16

第33図	S P835 出土遺物実測図	17
第34図	S P835 遺物出土状況	17
第35図	S P835 周辺の造構全景	17
第36図	掘立柱建物跡1・2平面図	18
第37図	掘立柱建物跡3、S B11平面図	19
第38図	S K03遺物出土状況	19
第39図	S K03出土遺物実測図	20
第40図	S K26全景	21
第41図	S K26遺物出土状況	21
第42図	S K26出土遺物	21
第43図	S K26出土遺物実測図	21
第44図	S D45全景	21
第45図	S K13遺物出土状況	22
第46図	S K13遺物出土状況	22
第47図	S K13出土遺物	22
第48図	S K13出土遺物実測図	23
第49図	S X01・S X02全景	23
第50図	S X02埋土断面	23

第1章 調査に至る経過

調査・研究史抄 新免遺跡は豊中市玉井町を中心に立花町・末広町の一部を包括し、その推定面積はおよそ15万平方メートルにおよぶ。隣接する本町遺跡、山ノ上遺跡とともに豊中台地末端部に所在する遺跡として著名である。

新免遺跡の命名は、昭和36年に刊行された『豊中市史』第1巻「弥生文化とその諸遺跡」の中で藤沢一夫氏によりはじめてなされたものである。その当時、昭和10年代に地元の民家庭園内で採集された弥生土器片を唯一の提所として、弥生時代後期に属する遺跡であることが想定されたものの、遺跡の規模、性格など具体的な内容について論じられるまでには至らなかった。

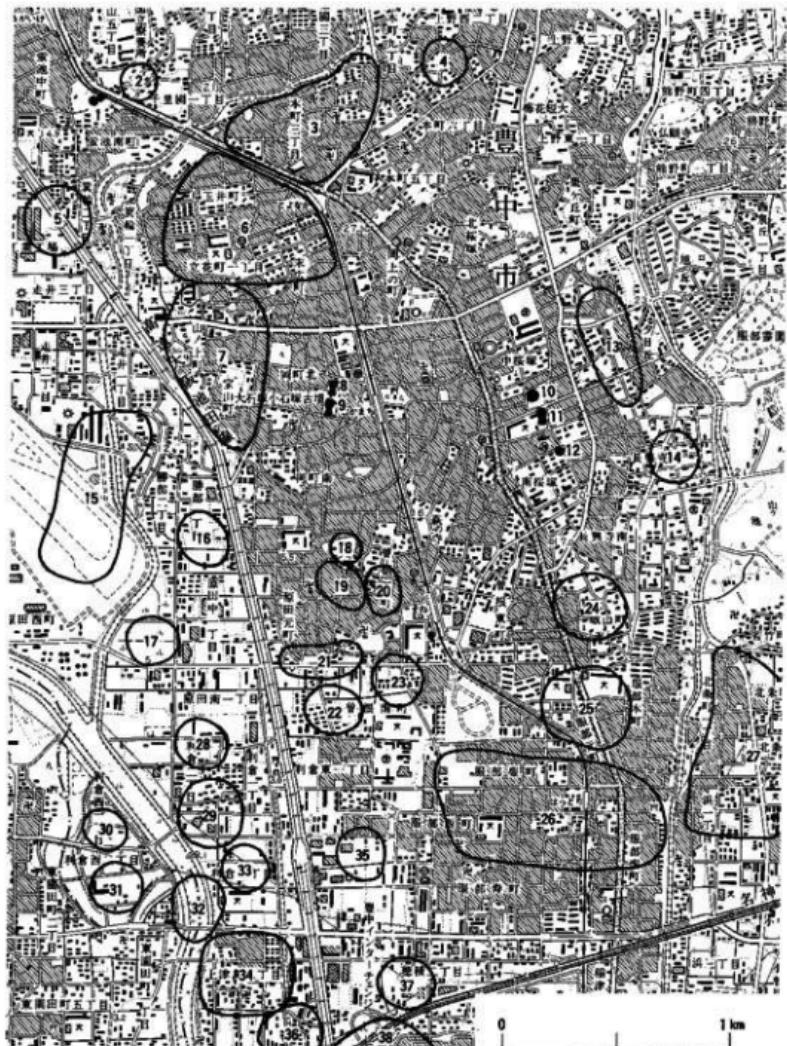
新免遺跡に関する知見は、その後1970年代後半から80年代にかけて飛躍的に増加した。その第1の要因として、明治43年の箕面有馬電気鉄道（阪急宝塚線の前身）の開通以来、現在の豊中駅周辺から岡町一帯にかけて多数建設された木造住宅が、ここ数年老朽化するに至り、その建て替え工事に先立つ事前発掘調査が増加した事実をあげることができる。その結果、現在までにすでに10次に及ぶ発掘調査が実施されている。

以上の調査の概要については、各年度の『豊中市埋蔵文化財発掘調査概報』に報告済みであるためここではふれないが、これまでの調査から当遺跡が弥生時代中期前葉から近世に亘る長期の複合遺跡であること、とくに弥生時代については集落と墓地とが一遺跡内に完結する姿を想定しうるに至った点などから、豊中台地に所在する諸遺跡の中でも、とくに中核的な位置を占める遺跡であることが知られるに及んでいる。

調査の契機と経過 阪急電鉄株式会社、大阪府、豊中市の三者は、現在、国庫補助事業として阪急宝塚線連続立体交差工事を進めている。この計画の中で豊中・萱池間については現本線南側に仮線の設置が予定されるところとなり、その予定地の一部が新免遺跡の推定範囲内に含まれることが判明した。そこで市教委は、遺跡の推定範囲内および一部周辺地域について試掘調査を実施したところ、豊中駅西方約350mの範囲に亘って遺構、遺物包含層の存在を確認し、市街中心地にもかかわらず、意外にも保存状態の良好な遺跡であることが判明したのである。その後、府、市、阪急電鉄株式会社の三者協議にもとづき、豊中市教育委員会社会教育課内に事務局を置いて阪急連立遺跡調査団を組織し、昭和60年8月26日から約3ヶ月間の日程を得て本調査を実施するはこびとなったのである。

調査は、予定通り8月26日より重機掘削に入り、11月30日をもって全ての現地作業を終了し、翌12月1日、現地説明会を行ない、市民など約150名の参加を得た。

調査組織 調査を実施するに際しては服部聰志が現地を担当し、調査員として祭本敦士、調査補助員として岡崎茂和、竹谷俊彦らが参加した。また調査の進行にあたって、都出比呂志（大阪大学文学部助教授）、富田好久（青山女子短期大学講師）、井藤暁子（大阪文化財センター）の各氏に御指導、御助言をいただいた。記して感謝の意を表したいと思います。



1. 鶴神山古墳 2. 南刀根山遺跡 3. 本町遺跡 4. 金帝山廐寺跡 5. 箕輪遺跡 6. 新免遺跡
 7. 山ノ上遺跡 8. 小石塚古墳 9. 大石塚古墳 10. 大冢古墳 11. 鶴子塚古墳 12. 南天平塚古墳
 13. 下原窓跡群 14. 長興寺遺跡 15. 腹部遺跡 16. 腹部東遺跡 17. 原田中町遺跡 18. 原田城跡
 19. 原田遺跡 20. 曾根遺跡 21. 原田元町遺跡 22. 曾根南遺跡 23. 豊島北遺跡 24. 城山遺跡
 25. 腹部遺跡 26. 植積遺跡 27. 小曾根遺跡 28. 利倉北遺跡 29. 利倉遺跡 30. 椿堂の前遺跡
 31. 利倉西遺跡 32. 上津島川庄遺跡 33. 利倉南遺跡 34. 上津島遺跡 35. 腹部西遺跡 36. 上津島南遺跡
 37. 植積ポンプ場遺跡 38. 島田遺跡

第1図 周辺遺跡分布図

第2章 位置と環境

新免遺跡は阪急豊中駅の西方、およそ南北600m、東西800mの範囲に広がる遺跡である。今回の調査対象地点は、豊中市玉井町1丁目11番地および玉井町2丁目1番地に所在し、遺跡の推定範囲内でも東北端に位置し、範囲を明確にする上でもポイントとなる地点である。

地理的環境 豊中市域は地形的にみて、大きく平野部と丘陵部に分けることができる。このうち丘陵部は豊中台地と通称される低平な台地状地形を呈し、市域東北部の一画を占めている。この台地の様相を現行の地形図から読みとることは難しいが、明治8年初版の陸地測量部作成の地形図は、往時の自然地形を如実に伝えている（第3図）。これによると新免遺跡は、台地西端部の比較的高低差の乏しい低位段丘面上に立地し、北に千里川、西に比高5~6mの段丘壁を隔てて広大な沖積平野を控え、平野部からの眺望は一種の高台としてのイメージを与える。

遺跡の範囲をこの地形図をもとに推定すると、その北限は東南方向に走る小さな谷状地形により画され、西方は弧状にまわる台地端部の急な段丘壁により、そして南方は旧山上村の北方にみられる緩く入れ込む谷状地形により画されるものと考えられる。また東側については、一部で実施した立会調査の所見から、現在の阪急宝塚線付近までは広がらないようである。した

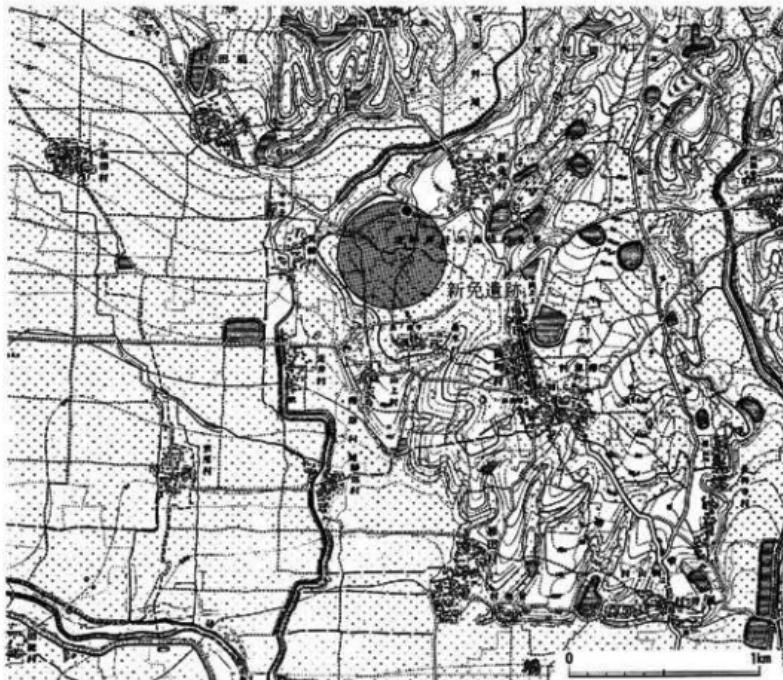


第2図 調査地点位置図(網目は既調査地点)

がって、これまでの限られた調査の結果からあえて判断するとすれば、実際の遺跡範囲は図に示したような円形ではなく、むしろ台地縁辺部を弧を描くように分布していた可能性が高いと考えられる。

いずれにせよ当遺跡は、居住地にふさわしく、起伏の少ない平坦な地形上に立地し、しかも段丘崖面下には千里川が南流し、西方一帯には広大な沖積平野を控えるなど、極めて良好な居住環境を有する遺跡であったことが推量される。

歴史的環境 遺跡西方の平野部には、台地縁辺に沿って、北より螢池西、箕輪、勝部の各遺跡が所在し、とくに勝部遺跡は弥生時代前～中期の拠点的集落として著名である。また箕輪遺跡では弥生中期中葉の竪穴住居跡、掘立柱建物跡が、螢池西遺跡でも弥生中期に所属する大溝が検出され、広大な沖積平野を背景とした弥生集落が、微高地上に線状に分布していたと考えられる。これに対し台地上には、新免遺跡を始め、西方に隣接する本町遺跡、南方に山ノ上遺跡が所在し、低いながらも山の村の様相を呈している。このうち山ノ上遺跡では、近年調査を実施した第3・6次調査にて弥生前期中段階に属する溝を検出し、弥生土器とともに晩期終末の特徴を備えた少量の縄文土器片が出土。弥生前期の段階にすでにその地名の示すごとく、山



第3図 新免遺跡と周辺地形図（黒丸印は調査地点）



第4図 上空から見た調査地点

の上の村が存在していたことを明らかにしている。この遺跡ではほかにも弥生時代後期から平安時代に至る遺構、遺物が検出され、とくに第5次調査で明らかにした古墳時代中期の3棟の竪穴住居跡は、近接する桜塚古墳群の成立を考える上で重要である。また第1次調査で出土した梵字瓦を含む瓦当類は、平安時代後期の寺院跡の存在を推測させるものである。

このように当地域は、弥生時代を通じて平野部と丘陵部にそれぞれ大小の集落が同時併存していたと考えられるが、各集落間の関係についてはなお今後の調査に期待されるところが大きい。

ところで、新免遺跡および本町遺跡ではこれまでに弥生時代の遺構に重複する形で古墳後期の遺構が数多く検出されている。両遺跡に特徴的なことは、一般的な古墳後期の集落に比して須恵器の出土率が高い点であり、焼成不良品あるいは一部窯体片の融着したものも認められるところから、東北方に分布する桜井谷古窯跡群との密接な関係が窺われる。この両者は千里川の水運によって結ばれ、2つの遺跡がいずれも千里川が平野部に注ぐむ台地端部に立地することから考えると、おそらく窯跡で焼成された須恵器を一旦集積し、選別し、出荷する役割を担った集落であった可能性が高い。

以上のように新免遺跡は、弥生時代と古墳時代後期にとくに大きな動きが認められるが、その後の動向については、今回の調査で検出した平安時代の土壙墓のように、わずかながら生活の痕跡が見出されるものの、これまで顕著な中、近世の遺構、遺物の検出をみると至っていない。明治の地形図を見ても、当遺跡周辺は新免村、轟水村の錯雜地となっており、大部分が水田でおおわれていたようである。このことは、現在の国道176号線の前身である能勢街道が整備されていくにしたがい、居住地域は自然と街道沿いを中心に集中するようになり、街道から離れた当遺跡周辺などは、次第に田地へと転換していくことによるのであろう。

第3章 層序と遺構の状況

まず調査の方法について簡単に述べておく。第5図に示したごとく、当調査地点は長さ190m、幅7mの細長い形状を呈し、その方位も東西・南北ラインに必ずしも一致していない。そのため、調査区の設定に際し、今回はあくまでも便宜上、調査地点の方位にもとづいて中央ラインを設定し、5m間隔で各ポイントを設けることとした。また調査の進行上、調査地点を大きくA、Bの2地区に分け、各ポイントの名称については西側ポイントの名称で呼び、P-1、2、3…区のようにした。

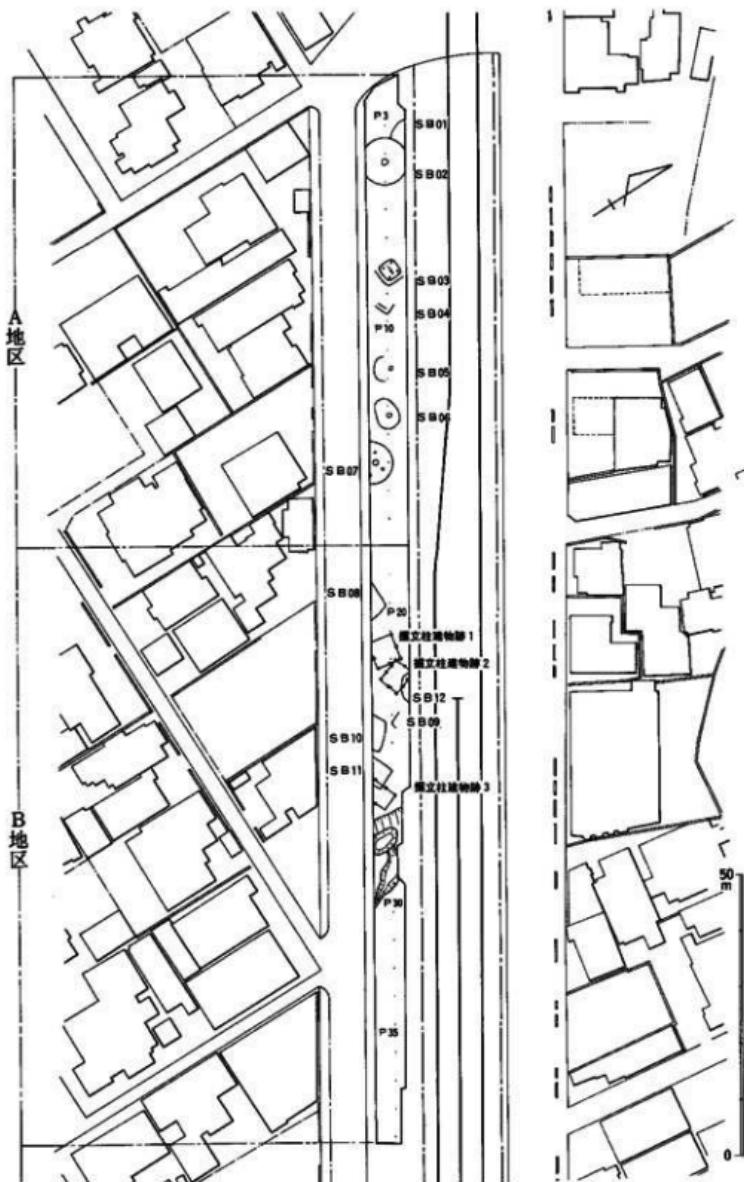
さて基本層序は、B地区P-28区を境として大きく異なっている。これはP-28区付近にて地山が約0.8mの落差をもって大きく落ち込み、東側が一種の谷状地形ともいべき地形を呈することによる。この地形は一旦大きく落ち込んでのち、多少の凹凸がみられるものの全体として平坦面を形成している。この部分の層序は上部に約40cmの厚さで盛土があり、その下に床土とみられる黄褐色粘質土が3層前後認められ、地山直上にはマンガン粒を多量に含んだ砂質の茶灰色土が薄く堆積している。遺物は全体として少ないが、須恵器を中心としてほとんどが地山直上の最下層から出土している。

一方、落ちより西方では、上部に約50cmの盛土層、下部に多量の遺物を含む暗茶褐色粘質土が堆積し、その下は黄色粘土層、赤褐色砂礫層からなる地山である。後世における擾乱、削平のため一部では遺物包含層が消滅している箇所も認められた。

遺物包含層には、弥生土器、須恵器の混入が顕著である。弥生時代以前に遡る遺物として、わずかに縄文時代の石鏃、石匙等を含む他は、前後の時期の遺物をほとんど含まないので、この層の形成時期が概ね古墳後期に限定しうるものと考えられる。ただし遺物総数に占める弥生土器の割合が相当に高く、出土レベルも一定しない点からすると、沖積地に見られるような純粹な包含層とはみなしえ難いようである。実際、検出した弥生時代の住居跡のいずれもが上部を大きく削平され、高さを減じていることなどは、おそらく古墳後期の段階に、弥生時代の包含層や遺構埋土をも移動させたような整地作業が実施された可能性を示すものであろう。

検出した遺構の大半は、P-28区の落ちより西側に集中している。遺構として竪穴住居跡11、竪穴状遺構1、掘立柱建物跡3、土塙墓1、溝30、土塙45、ピット845があり、その所属時期は弥生時代中期から平安時代に亘っている。これらの遺構の大半は、遺物包含層を除去した段階で、地山上面にて検出したものである。ただし古墳後期の遺構の一部と平安時代の土塙墓(SK13)などは、断面観察から包含層の上部から掘り込まれたものらしい。

一方、P-28区の落ちより東方では全体として遺構の数は少ないものの、中、近世の貯水池状遺構1、溝3、土塙1、ピット13を検出している。ピットのうち1つ(S P835)からは2個体の高杯が半ば投棄された状態で出土していることから、西方の居住区とは性格を異にする空間とみることが可能である。



第5図 調査地区割図・透構配置図

第4章 弥生時代の遺構・遺物

(1) 遺構の概要

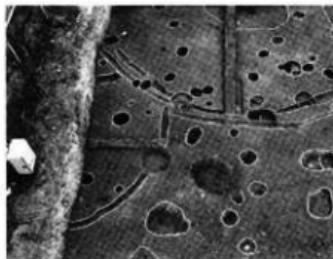
弥生時代の遺構として竪穴住居跡11、竪穴状遺構1、溝、土塙、大小のピット多数を検出した。遺構は各地区に密集し、住居跡なども調査区全域に分布している。しかし遺構検出面は浅く、後世の擾乱、削平により住居跡の掘形などはほとんど原状を留めない状態であった。

以下、竪穴住居跡群を中心に説明を行う。

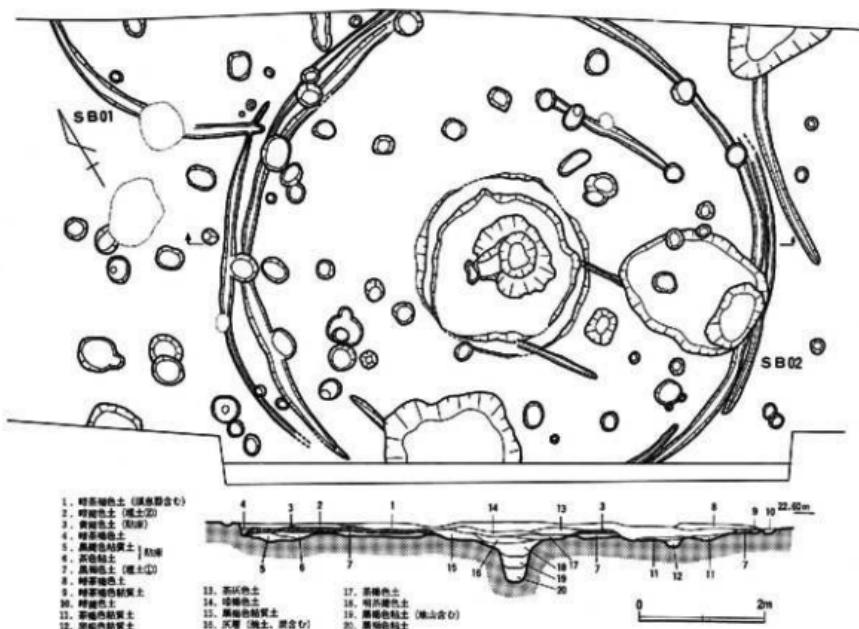
(2) 竪穴住居跡群

SB01 A地区P-3、4区に位置し、SB02と一部重複する。住居跡のプランは円形で、規模は推定で直径約6mを測る。柱穴とみられるピットを2ヶ所で検出している。壁溝は幅約25cm、深さ5cmを測る。

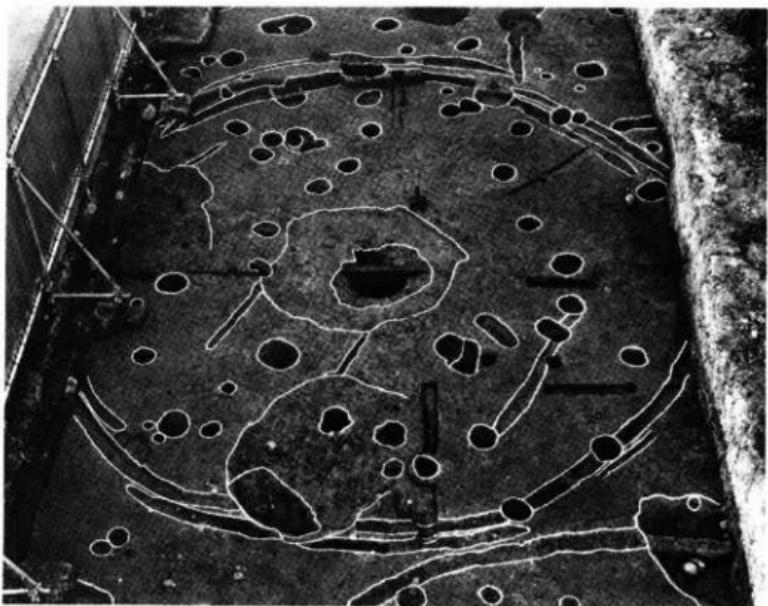
SB02 A地区P-3、4区に位置する円形の大形住居跡である。壁溝の本数から少なくとも1回以上の



第6図 SB01全景

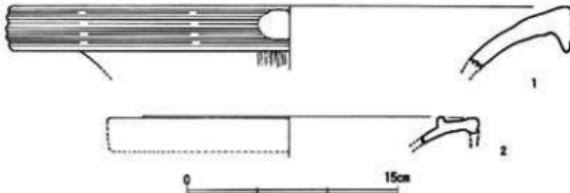


第7図 SB01、SB02平面図・断面図



第8図 SB02全景

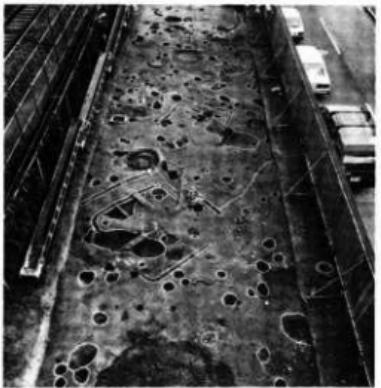
建て替えが行われた
と考えられ直径 8.4
m から 8.7m へと同
心円状に拡張が行わ
れている。このこと
は埋土断面に貼床を
確認している事実か



第9図 SB02出土遺物実測図

らも裏付けられる。床面には多数の柱穴を検出したが、主柱穴の数、配置等については今後の作業に期したい。住居跡中央部には長径約90cm、短径約70cm、深さ約54cmの炉跡を確認した。炉跡の周囲には、地山を約6cmの高さで削り残した土手状の高まりが巡り、その外径は約2.8mである。壁溝はいずれも幅約20cm、深さ3~10cmを測る。この住居跡は今回検出したうちで最大規模を有し、一般に弥生時代の住居跡としても大形に属するものと考えられる。

炉跡周囲の地山に密着して、壺の口縁部破片1点(第9図1)が出土した。口径約40.3cm。下方に引き伸ばされた口縁部外面には4条の凹線が施され、径2cmの円形浮文とみられる剥離痕が認められる。また住居跡埋土下層より出土した高杯破片(2)も当住居跡の存続時期を示す資料とみて差し支えない。



第10図 SB03、SB04全景



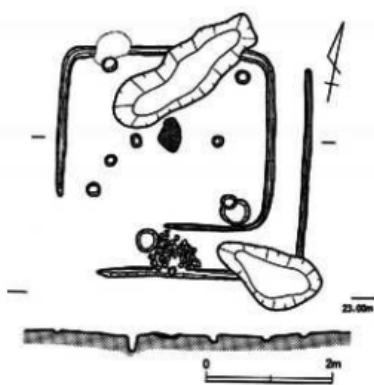
第11図 SB03全景



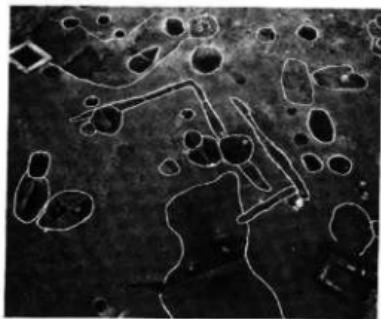
第12図 磚集積ピット断面

SB03 A地区P-8,9区に位置する隅丸方形の堅穴住居跡である。二重に壁溝をめぐらしたもので、規模は内側で長辺約3.4m、短辺約3.0m、外側で一辺約4.4mを測る。内側の溝で囲まれた部分は、1住居の占有面積としては小規模過ぎる点からみて、二重の壁溝は建て替えに伴うものではなく、いわゆるベッド状遺構を形成したものらしい。柱穴は内溝各コーナー付近にて直径20~30cm、深さ20~40cmのものをそれぞれ検出した。また炉跡を狭んで各1の柱穴を検出したが、炉に伴う構造物、もしくは上屋に伴う支柱かとも考えられる。炉跡は長径約60cm、短径約40cmの地床炉で、楕円形を呈し、深さ5cm前後の極めて浅いものである。周囲は熱のため赤変していた。壁溝は幅15~20cm、深さ4~5cmを測る。

なお、南側の外壁溝に接して、礎の集積が認められた。礎を除去した後に、長辺50cm、短辺30cm、深さ30cmのピットを検出したが、その性格は不明である。



第13図 SB03平面図

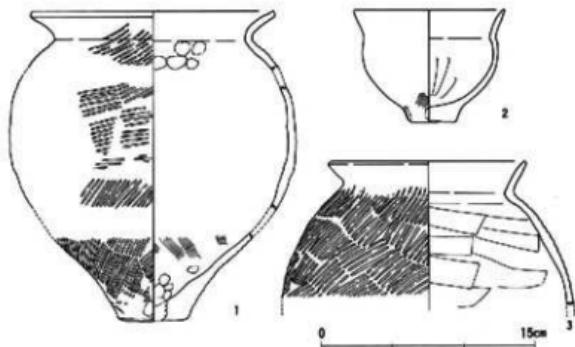


第14図 SB04全景



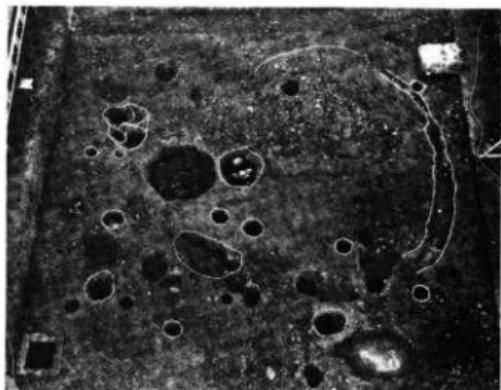
第15図 SP214 遺物出土状況

SB04 A地区P-9区に位置するが、大半が削平のため詳細は不明である。隅丸方形の竪穴住居跡と考えられ、規模は壁溝の検出長約2.7mを測るにとどまる。主柱穴とみられるものは3ヶ所で検出したものの、配置等については判然としない。住居跡中央部より西に偏して長軸約90cm、短軸約60cm、深さ約10cmの橢円形の浅い炉跡を確認した。壁溝は東側および南側にて検出し、幅約10cm、深さ2~3cmを測る。なお南側壁溝に重複して掘り込まれたSP214の埋土中より、後期の甕上半部と鉢が重なるように出土した。鉢(第16図2)は口径10.6cm、器高8.0cmで、外面をハケおよびナデ、内面はハケのちナデ調整。甕(3)は口径13.9cmで、外面にはやや粗いタタキ、内面は板ナデの痕跡を残す。また炉跡埋土中より出土した甕(1)は口径17.0cm、器高およそ22.4cmで、外面は3に比べやや細いタタキを施し、内面はハケとナデにより調整を施す。以上3点はいずれも後期でも後半期に比定され、当住居跡の所属時期を示す資料である。



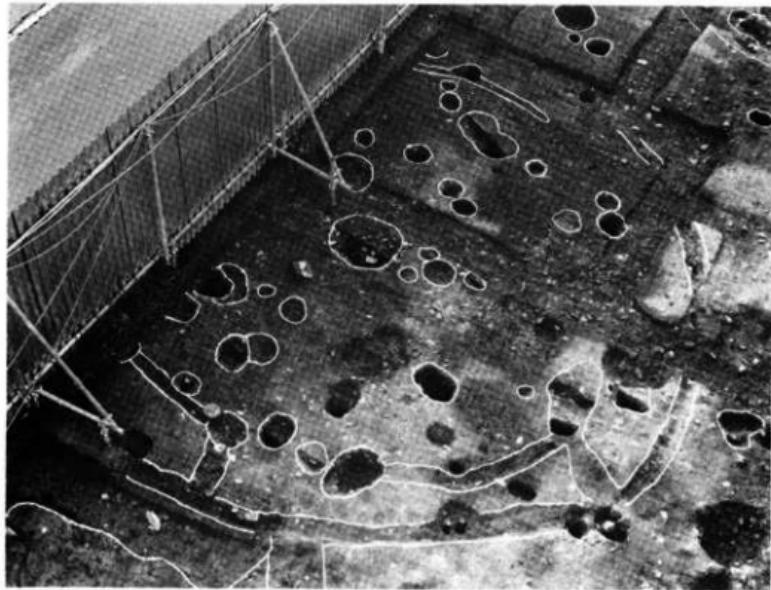
第16図 SB04出土遺物実測図

S B05 A地区P-11区に位置する。南側に壁溝の一部を残すのみで、大部分が削平を受け、詳細は不明である。円形プランの竪穴住居跡と考えられる。遺存した壁溝は幅約10~40cm、深さ4~6cmである。また住居中央部と思われる部分に直径約70cm、深さ約38cmの炉跡とみられるピットを検出した。



第17図 S B05全景

S B07 A地区 P-14、15区に位置し、住居跡の南半部は調査区外に延びる。円形プランの竪穴住居跡で、1回の建て替えが行われ、直径約5.5mから約7.2mへと拡張されている。柱穴は3ヶ所にて、直径40~50cm、深さ30~40cmのものを検出した。また中央の炉跡は直径約80cm、深さ約60cmの規模を有し、埋土から壺の口縁部と体部の破片を検出した。壁溝は幅25~30cm、



第18図 S B07全景

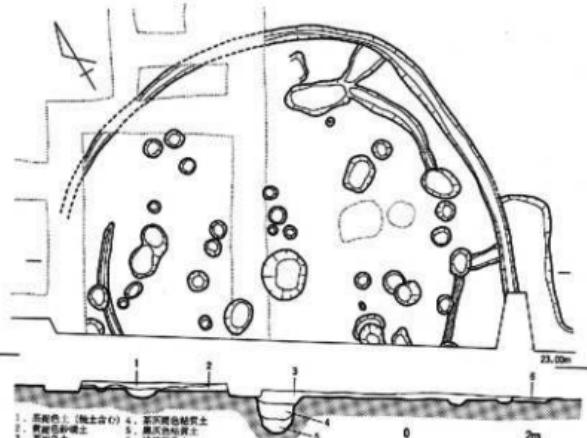
深さ約6cmである。

炉埋土より出土した壺の口縁部(第20図)は、下方に引き伸ばされた口縁端部に4条の鈍い回線が施され、6方向に円形浮文が貼付される。円形浮文は剥離痕から見て、おそらく3個で一単位をなすと思われる。体部破片とともに、胎土には金雲母、角閃石を多く含み、生駒西麓産の胎土とみられる。

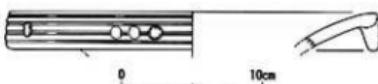
S B08 B地区P-19、20区に位置する。住居の大部分が調査区外へ延びるため詳細は不明。隅丸方形プランの竪穴住居跡で、壁溝の検出長は約4.5mである。壁溝の幅10~25cm、深さ3~6cmを測る。

S B09 B地区P-23、24区に位置し、S B10とS B12にはきまれた形で存在する。幅約10cm、深さ約2cmの壁溝の一部を検出したが、上部の削平および溝との切り合いのため詳細は不明。住居跡のプランは隅丸方形と考えられる。

S B10 B地区P-24区に位置し、大部分が調査範囲外に延びる。壁溝とみられる溝を1~4本検出し、少なくとも1回以上の建て替えが行われたらしい。最も外側の壁溝から、0.6~1.0mの幅で一段高まるところからベッド状造構の可能性が高い。隅丸方形プランを呈し、規模は東西約5.4m。柱穴は確認できなかった。なお埋土下層より磨製石鎌が1



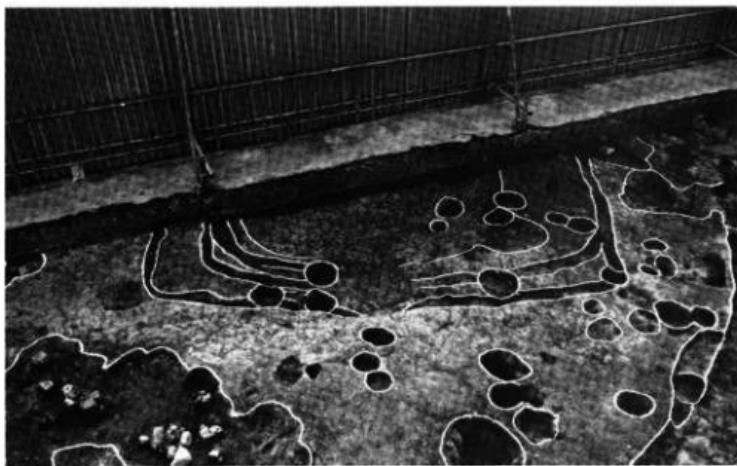
第19図 S B07平面図・断面図



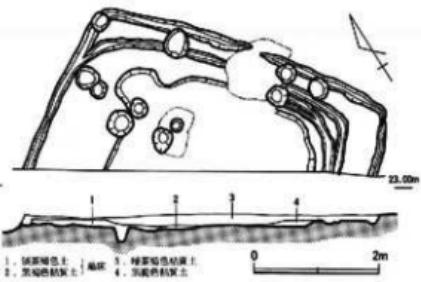
第20図 S B07出土遺物実測図



第21図 B地区西側全景



第22図 SB 10全景



第23図 SB 10平面図・断面図



第24図 磨製石錠出土状況

点出土している

SB 11 B地区P-25、26区に位置する。南北に長い隅丸方形の竪穴住居跡で、規模は東西約3.6m（南北は不明）。柱穴に相当するものは検出できなかったが、中央部に長径25cm、短径15cmの範囲で床面が焼けた部分が存在し、炉跡と考えられた。壁溝は幅10cm未満の狭いもので、深さ約5cmを測る。なお住居跡西南端の床面付近にて壊とみられる体部破片が出土した。厚さ約1.5mmの薄手のつくりで、内面の全面にハラケズリの痕跡を認める点から、弥生後期終末から古墳前期にかかる頃と推定される。今回検出した住居跡群の中で最も時期が下降するものであろう。

SB 12 B地区P-22、23区に位置し、住居の一部を検出した。壁溝が二重にまわるところから建て替えが行われたものと推定される。平面プランは円形か、もしくは部分的に緩い稜を認めるところより多角形の可能性も考えられる。壁溝は幅25~30cm、深さ5~8cmを測る。



第25図 SB 11全景



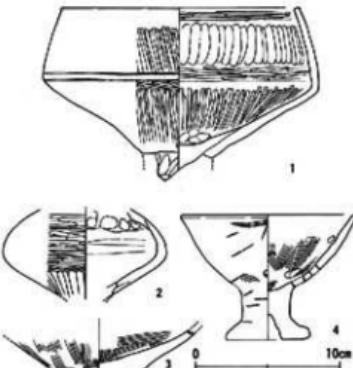
第26図 SB 12全景

第27図1は床面直上にて出土した脚台付鉢の鉢部である。「く」字状に大きく屈曲して立ち上がる口縁部を有し、屈曲部にヘラによる2条の沈線が施される。内外面ともに非常に丁寧なミガキ調整が行われている。また鉢部底部は円板充填法によるものである。2、4は壁溝埋土上層から出土した。2は壺の体部で外面はミガキ、内面はナデ調整を施す。4は高杯もしくは小形の器台かともみられる。手づくねにより成形され、内外面の一部にはハケ調整が施される。また、体部下半には円孔の一部を認める。

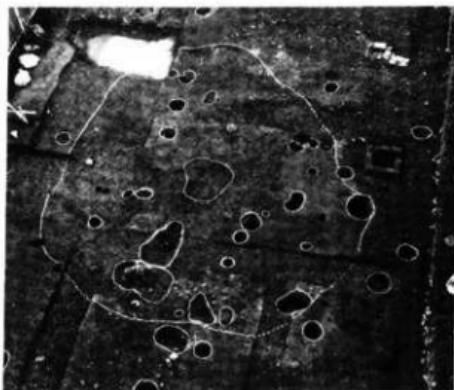
(3) その他の造構

竪穴状造構 (SB 06) A地区P-11区に位置する。規模は長径約5.8、短径約5.3mで、不定形な楕円形を呈する。肩口からなだらかな傾斜で落ち込み、比高差5~10cmを測る。造構内には、深さ20cmに満たない小ピット10数個を検出したが明らかに柱穴とみられるものは存在しない。また、中央部には直径約70cm、深さ約38cmの大形のピットがある。

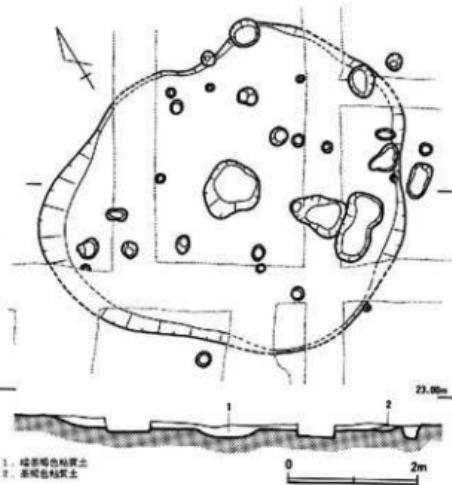
出土遺物の大半は造構埋土出土の



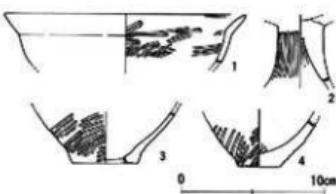
第27図 SB 12出土遺物実測図



第28図 竪穴状造構 (SB 06) 全景



第29図 穴状遺構 (SB 06) 平面図・断面図



第30図 穴状遺構出土遺物実測図
岡山県上東遺跡などに類似例を見出すことができる。しかし、分銅形土製品の最も大きな特徴である上下対称の形態については、首のクビレの形状について若干の難点を認める。すなわち

ものであるが、第30図1の鉢は比較的床面に近い位置にて出土した。口径16.9cmで外面をナデ、内面をミガキにより調整する。その他高杯脚部(2)、タキメを有する妻底部(3、4)などがある。

なお出土遺物洗浄過程にて、人面を表現した1点の土製品を検出した。頭部から首の部分にかけて造存し、現存長4.85cm、幅4.1cmを測る。頭部はやや縦長の長方形で、耳朶の部分は若干外側に張出す。表面には眉、目、鼻、口が明瞭にあらわされ、目、口は陰刻、眉、鼻は欠失しているが、本来突出してつくられていたようである。

頭部には直径1mmの細かい刺突文が二重に施され耳は2ヶ所の孔で表現されている。厚みは0.9~1cmと平均し、板状を呈する。

この土製品は頭部に竹管状の刺突文を有する点、中央部に人面を表現し、耳朶に孔を有する点など、「分銅形土製品」との類似性を多く認めることができる。また頭部が長方形を呈する点については、岡山県上東遺跡などに類似例を見出すことができる。しかし、分銅形土製品の最も大きな特徴である上下対称の形態については、首のクビレの形状について若干の難点を認める。すなわち



第31図 人面付土製品

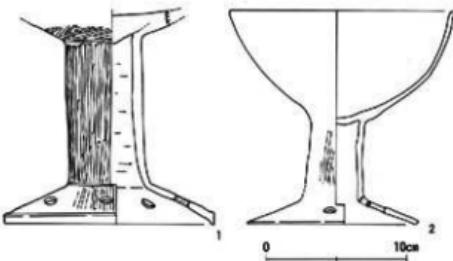


第32図 人面付土製品実測図

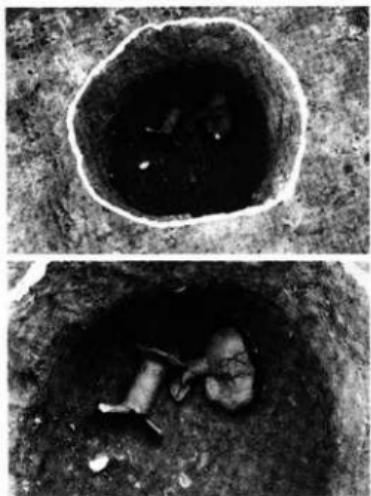
ち本例では、頭部下端部が一旦大きくくびれ、下方に向かってほぼ一直線に「ハ」字状に開いており、この形態から下部にも頭部と同様の形態を想定することには若干無理があるようにも思われる。ただ、この点については岡山県百間川兼基遺跡出土の人形土製品にみられるように、必ずしも分銅形を呈するものばかりでなく、本例については下部に手足がついても不思議ではない形態といえる。いずれにせよ、造存部が限定されていることもあり、ここではその形態および文様表現の共通性から、それが有する性格をも含めて、分銅形土製品のバリエーションの中に含めて考えておきたい。

S P 835 B地区P-34区に位置する。直径約70cm、深さ約50cmの大形のピットである。埋土は大きく2層に分かれ、上層から高杯脚部破片1、底部より倒れた状態で高杯2点が出土した。出土遺物は高杯に限られ、他の器種を含まないことから、特殊な性格が窺われる。

底部付近にて出土した高杯のうち一方（第33図1）は柱状の長い脚部を有するもので、脚裾部に7方向の円孔を穿つ。外面はミガキ、内面はケズリが施される。他方（2）は塊状の杯部を有するものである。脚裾部の円孔の個数は不明。



第33図 S P 835出土遺物実測図



第34図 S P 835遺物出土状況



第35図 S P 835周辺の遺構全景(矢印がS P 835)

第5章 古墳時代の遺構・遺物

(1) 遺構の概要

古墳時代の遺構として、掘立柱建物跡3、溝、土塙、ピット多数がある。遺構の大半に須恵器を伴なうことから、その所属する時期はほとんどが後期に限られるようである。遺構の分布は、P-28区落ちの西側ほぼ全域において認められるが、建物跡、溝などはとくにP-16区より東側に集中するようである。

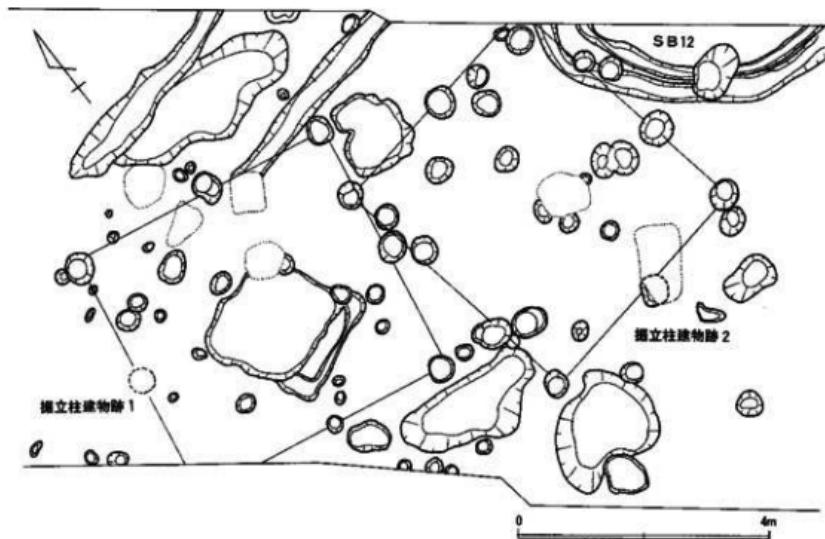
以下、主要な遺構、遺物についてのみ報告する。

(2) 掘立柱建物跡

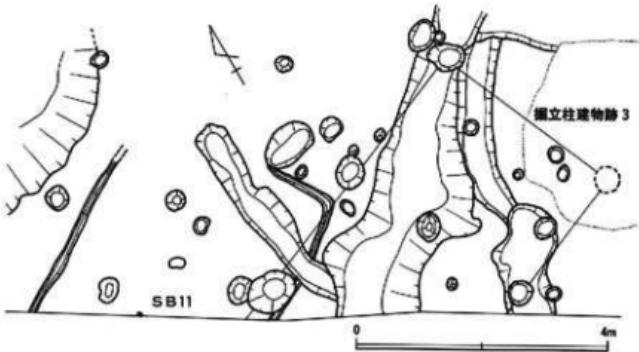
掘立柱建物跡1 B地区P-21区に位置する東西2間(4.4m)、南北2間(4.2m)の方形の建物である。柱間寸法は2.0~2.3mであり、柱穴は直径30~40cm、深さ16~20cmを測る。西辺中央の柱穴は削平のため検出できなかった。

掘立柱建物跡2 B地区P-22区に位置する。桁行2間(4.0m)、梁行3間(4.4m)のほぼ方形を呈する建物である。柱間寸法は桁行が約2.0m、梁行約1.5m。柱穴は直径40cm前後、深さ38~40cmを測る。

掘立柱建物跡3 B地区P-22区に位置する建物である。規模は一部が調査範囲外に延びるため明確ではないが、桁行1間分、梁行2間分を検出した。柱間寸法は桁行約3.3m、梁行約2.5



第36図 掘立柱建物跡1・2平面図



第37図 柱立柱建物跡3、SB11平面図

m。柱穴は直径40~60cm、深さ25~30cmを測る。

(3) その他の遺構

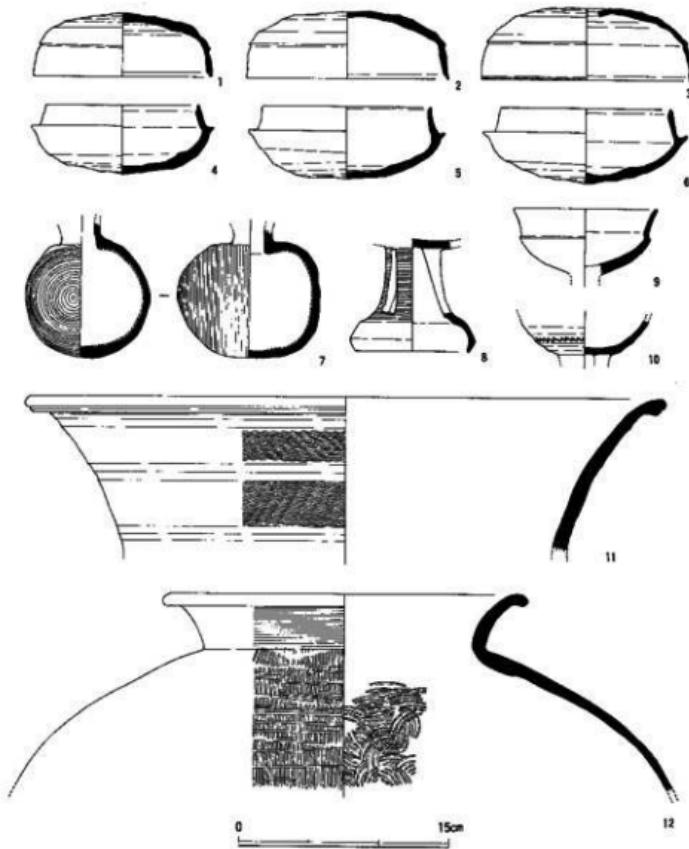
SK03 A地区P-4区に位置する長径1.75m、短径1.25m、深さ約20cmの土塙である。SB02の一部に重複する形で検出した。埋土中には多量の須恵器が器種の別なく集積され、下層にいくにつれ希薄になっていく状態であった。

第39図はSK03出土遺物の実測図である。杯蓋の口径12.6~14.8cm、蓋杯の受部径13.0cm~14.6cm。杯蓋の天井部と口縁部を界する稜は比較的シャープなもので、口縁端部内面の段も明瞭である。3は口縁端部にハケメを有する。また蓋杯は立ち上がりが比較的急な傾斜をもち、口縁端部内面の段は凹線に近く、受部は外側に向かって引き伸ばしがみに作られる。7は小形の横瓶ともいえるものである。8は有蓋高杯の脚部で3方にスカシ孔を有し、外面はカキ目調整が施される。9・10は無蓋高杯の杯部、11・12は蓋の口縁部である。杯・高杯の特徴からMT15型式に所属するとみられる。

SK26 A地区P-16・17区で検出した、かなり大形の土塙である。規模は検出した長さ約8m、幅2.7m以上、深さ3~20cmを測る。埋土は一様に暗茶褐色粘質土が溜り、上層に一括して須恵器が集積されていた。器種は蓋杯、杯蓋のみに限られ、約30個体を数える。これらは土塙の中で一部に集中し、出土レベル



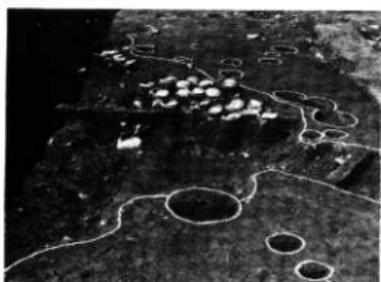
第38図 SK03遺物出土状況



第39図 SK 03出土遺物実測図

も一定していることから、さらに上部より掘り込まれた、別の土塙に伴うものとも考えられる。ただ断面観察による限り、掘形等の痕跡を認めることはできなかった。

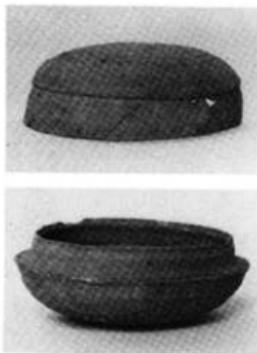
出土した須恵器は蓋杯、杯蓋が大半を占める。杯蓋は口径14.4cmから16.4cmを測り、かなり大きさにはばらつきがある。器形の特徴も天井部と口縁部を界する稜が明瞭なもの、不明瞭なものがあり、口縁端部内面の段についても同様である。蓋杯は受部径13.6cmから16.0cmを測り、杯蓋と同様の傾向を認める。立ち上がりはやや内傾の兆候を示し、口縁端部内面の段についても杯蓋と同じく、明瞭・不明瞭なものがある。一部に新しい特徴を備えながらもなお古い様相を留めており、陶邑編年の中T K15もしくはT K10型式に所属すると考えられる。



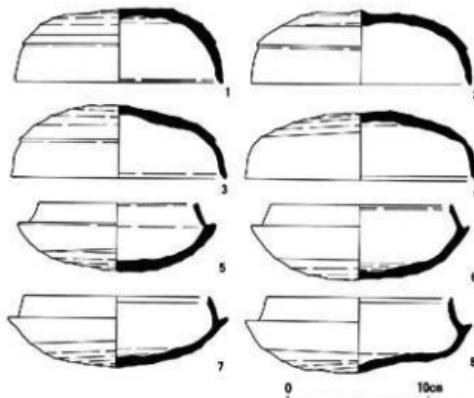
第40図 SK 26全景



第41図 SK 26遺物出土状況



第42図 SK 26出土遺物



第43図 SK 26出土遺物実測図

S D 45 B地区P-25区に位置する。幅約1.5m、深さ12cm前後の浅い溝であるが、ほぼ円を描くように回り、溝というよりもむしろ不定形土塹とした方がよいかも知れない。出土遺物として須恵器、土師器がある。



第44図 SD 45全景

第6章 その他の遺構・遺物

前章までに、弥生時代・古墳時代の主要な遺構・遺物についてその概要を述べてきたが、その他平安時代の古墳とみられる土壙（SK13）、中・近世の貯水池状遺構などを検出した。ここでは、上記2遺構についてのみ報告するにとどめたい。

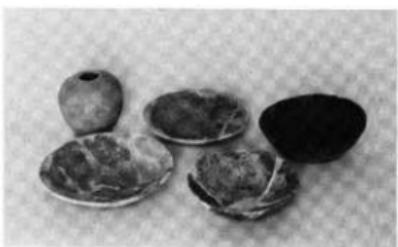
SK13 A区P-10,11区にて検出した長さ1.86m、幅0.69m、残存深度10cm以下の長楕円形の土壙である。後世の擾乱のため一部損壊を受けていたが、掘形底部の北側に偏して灰釉壺1、



第45図 SK13遺物出土状況



第46図 SK13遺物出土状況



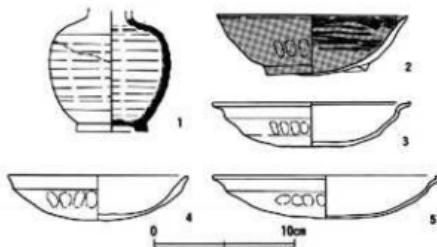
第47図 SK13出土遺物

黒色土器壺1、土師器杯1、土師器皿2がまとまって出土した。このうち灰釉壺は正立の状態、土師器杯・皿、黒色土器壺・土師器皿が互いに口縁部を合わせて故意に置かれたものと考えられる。掘形の規模、遺物の出土状態から、墓およびそれに伴う副葬品と考えられる。

第47図1は灰釉陶器の壺である。残存高8.1cm、最大径8.6cm、高台径5.1cm。外面は回転ヘラケズリ、内面は強いナデによる稜が顕著に認められる。灰釉は肩部付近にのみ施される。2は黒色土器の壺である。口径13.6cm、器高4.4cm、高台径7.1cm。外面はナデ、内面はやや間隔の粗いヘラミガキが施される。口縁端部の段は鈍く、明瞭な凹線を呈するに至っていない。炭素の吸着は内外面ともに認められるが、外面部は淡赤褐色の地肌を残す。が、全体としてB類に含めてよいと思われる。3は土師器の杯である。口径15.1cm、器高3.1cm。いわゆる「て」字状口縁を有し、外面は指頭調整による段を有する。4、5は土師器の皿である。4は口径12.8cm、器高3.2cm。口縁部外面に強いヨコナデによる明瞭な段をもつ。5は口径16.1cm、器高3.0cm。大きく外反する口縁部の縁部を上方に短かくつまみ上げている。体部下半は指頭痕が顕

著に認められる。

以上の出土遺物は、いずれも種類、形式を異にするところから、無作為に抽出されたものではなく、埋納に際して意図的に選別されたものと考えられる。黒色土器、土師器の型式的特徴からほぼ平安時代中頃に比定され、墓という遺構の性格からも一括資料としての価値は高いといえる。



第48図 SK13出土遺物実測図

貯水池状遺構（S X01） 調査区を地形的に大きく二分する落ち（P - 28付近）の直下にて検出した、長さ約6m、幅2.7m、深さ約2.6mの大形土壘（S X01）である。埋土は大きく二分され、上層は黄褐色粘質土、灰褐色粘質土、地山の黄色粘土を混じる淡茶褐色土等からなり、下層は約1.4mの厚さで青灰色粘土が溜っていた。下層の堆積過程においては、その埋土の性質からみて一定の灌水状態にあったことが知られる。上層の埋土は、土壘の大半が自然埋没したのち、人為的に埋められたらしい。

この一種の貯水池ともいえる土壘の東側に接して南北に延びる不定形な溝状遺構（S X02）を検出した。これは最大幅3.3m、最大深度約1mを測るもので、南側に向かって幅が狭まり、南側調査区外にて終わるものとみられる。埋土は2層に大別され、茶褐色系の粘質土が流れ込んだのち、地山から遊離した大量の礫石によって埋没したらしい。この礫石に混じり、破断面の磨滅したやや多量の須恵器が出土した。同時に微量ではあるが白磁の小片等を検出したことから、やや消極的ではあるが中～近世のある段階にて埋没したものとみられる。上の2遺構は、その重複関係からみて、S X02の埋没後、S X01が掘削されたと推定される。



第49図 SX01・SX02全景



第50図 SX02埋土断面

第7章 まとめ

新免遺跡は、通称豊中台地の末端部、低位段丘上に立地する遺跡である。今回、第11次調査として、阪急連立事業に先立つ事前発掘調査を実施した結果、弥生時代の住居跡群、人面付土製品、古墳時代後期の掘立柱建物跡など、数多くの成果を得るとこころとなった。

今回の調査の中で、とくに重要な成果としてあげることができるものは、11棟を数える竪穴住居跡の検出であろう。これまでに豊中市域で検出した竪穴住居跡は、利倉西遺跡、箕輪遺跡、山ノ上遺跡^{注1)}、柴原遺跡^{注2)}の各例があり、このうち古墳時代中期以降に属する山ノ上、柴原例を除くと利倉西、箕輪遺跡とともに単独出土のものである。今回のように限られた調査範囲にもかかわらず、1度に11棟もの住居跡が検出されたことは、豊中市内はもとより近隣諸市に目を広げても稀なことであり、今後西摂地域における集落構造および居住形態の地域性の問題を考える上で重要である。

今回検出した竪穴住居跡は、円もしくは隅丸方形のプランを呈し、規模は一辺4.4mから直径8.2mのものまでバラエティに富む。このうち最も遺存状態の良好であったSB02は直径8.2mの規模を有し、一般に弥生時代の住居跡としても大形の規模に属するものである。これらの住居跡は、いずれも古墳時代後期の段階に上部を大きく削平されているために、時期を推定できるような資料は全体として乏しい。しかし、SB02が炉周開の床面直上から出土した壺口縁部の特徴から中期後葉、SB07も炉内埋土出土の壺口縁部よりSB02とほぼ同じ頃と推定され、円形プランを呈する住居跡の存続年代は概ね中期を中心としたものであったようである。一方、比較的資料にめぐまれたSB04は、炉およびピット出土の甕が後期でも後半期に比定され、SB10、SB11でも埋土下層より微量ながらタタキメを有する甕破片が出土している事実からすると、方形プランを呈する住居跡については、主として後期以降にその存続年代をおさえることができる。以上のことから、その厳密な移行期についてはなお決め手を欠くものの、後前期～中頃のある段階で円形から方形へと住居平面プランが変化しているものと推察される。

ところで以上のような変化は、單に平面プランの変化にとどまらず、炉の構造についても認められる。すなわちSB02、SB07など円形プランの炉跡が、直径70～90cm、深さ60cm前後を測り、炉壁に焼けた痕跡の認められない、いわゆる灰穴炉の形態をとっているのに対し、方形プランのSB03、SB04、SB11などは、直径20～30cm、深さ10cm未満の浅いもので、周囲が熱のために赤変した、いわゆる地床炉であることと対照をなしている。このことは、すでに埋土の大半が失われていたSB03に関しても、住居形態、炉の構造から、SB04などと同様、後期以降に營まれたものであることを示すものであろう。

なお、方形プランの住居跡にベッド状遺構を伴なうものの多い点も看過できない事実としてあげることができる。

以上のように、今回検出した竪穴住居跡群は、当遺跡における居住地域の一端を明らかにし、

弥生時代住居の好例に乏しい豊中市域にあって、該期の資料を充実させ、しかも時間的な推移の中で住居平面プランの変化過程を考察する上での大きな糸口を見出せたことは意義深いことである。ただ居住地全体の規模や存続期間など、集落としての具体的な内容については、今後の樹立部の調査成果に負うところが大きいといえるだろう。

ところで、以上の竪穴住居跡群に混在して竪穴状遺構（S B06）ともいべきものを検出した。規模は竪穴住居跡としても大過ないものであるが、平面形態は橢円形を呈し、壁溝も認められない。ただし中央部には直径70cm前後の大形のピットが存在し、周囲に10数個のピットを検出していることなどから、簡素な上屋構造を想定することも可能である。

この遺構埋土から、多くの土器片に混じり、人面を表現した一点の土製品が出土した。細部の特徴には、いわゆる分銅形土製品と多くの類似点が指摘され、共通の性格を有する土製品とみることが可能である。これまでに出土した分銅形土製品は、全国で155例以上を数えるが、^{註1)}分布の東限にあたる大阪府下では高槻市天神山遺跡、枚方市鷹塚山遺跡、八尾市亀井遺跡の3例をあげるにすぎず、類似資料として含めるならば今回の出土例で4例目ということになる。またこのうち人面を表現したものとしては亀井遺跡例について2例目である。一般に分銅形土製品の分布が、吉備地域を中心に広く瀬戸内海沿岸部に求められることを勘案すると、上記各遺跡と当遺跡のいずれもが、当時の海岸線もしくは瀬戸内海に流れ込む大型河川の流域に立地することは興味深い事実といわねばならない。

なお、S B12から出土した土器のうち、台付鉢（第27図1）は畿内に通有の土器形式の中にはあまり顕著に認められないものである。既知の資料による限り、この種のものは主として山陽方面を中心に分布するようであり、両地域の交流を示す資料として貴重である。加えて、山陽方面は分銅形土製品の分布の中心にもあたり、さきの土製品の存在とも合わせ、興味深い点の一つである。

さて、今回の調査の中で、いまひとつの成果として古墳時代後期に属する3棟の掘立柱建物跡の検出をあげることができる。過去10次の調査でも、須恵器を伴なう遺構は数多く検出されているが、実際に建物跡を検出したのは今回がはじめてである。3棟の建物跡はいずれも一般的の住居としても小規模なものである。時期を直接推定できる資料として、柱穴埋土の須恵器細片をあげるとどまり、その特徴はS K03やS K26など土塙出土資料とほぼ同型式のものである。今回の調査で、遺構および包含層から出土した須恵器は、ほとんどがM T15ないしT K10型式のものである点から、建物跡の営まれた時期も同型式期におさえることが可能とみられる。当該型式期は、遺跡東北方に分布する桜井谷窯跡群が生産を拡大し、窯数も増加させる時期に相当するところから、当遺跡における古墳後期集落の動向が桜井谷窯跡群の消長と不可分な関係にあったことが知られるのである。

註1)・(2) 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1984年度」1985年3月

(3) 都出呂志「弥生時代住居の東と西」「日本語・日本文化研究論集」大阪大学文学部 1985年12月

(4) 東 潤「分銅形土製品とその祭祀」「古代の顛」福岡市立歴史資料館 1982

豐中市文化財調査報告第16集
新免遺跡第11次発掘調査概報

1986年3月

発行 阪急宝塚線豊中市内連続立体
交差遺跡調査団
編集 豊中市教育委員会社会教育課
文化係
印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所